



_{一般財団法人} 芹沢光治良記念文化財団 ニュース (7)

代表理事 勝呂 奏 ご挨拶

去る3月11日に沼津市営墓地で、没後30年になった光治良忌が持たれた。僕は所用があって参加できなかったが、アメリカから帰国していた本会の理事の岡寿里さん(光治良の孫)がお見えになっての墓参になった。沼津芹沢光治良文学愛好会の代表・不破久温氏を中心にした行き届いたご準備あってのことで、心から感謝している。前代表の故・和田安弘氏の遺志を引き継ぐ運営には、長く光治良忌の中心にいた故・岡玲子さん(光治良4女)の思いが生きている。それは取りも直さず、芹沢光治良が後世に託した思いに応えるものだろう。

そのような今年であるが、コロナ禍にあって書面で済まさざるを得なかった理事会を、4月20日にオンラインで持つことができた。代表理事になっている僕が議長となり、岡寿里さん、弁護士の永井均氏、監事の内山隆太郎氏が出席して、事務局長の池田三省氏が陪席した。その席で運営に必要な議案を諮り、引き続き芹沢文学の顕彰に努めることを確認することができた。

今後に幾つかの事業を計画しているが、まずは『芹沢光治良ノート(3)』お届けできる運びになったことが嬉しい。5月4日の光治良のお誕生日に間に合うよう、編集に携わった各氏の労を多としたい。最後に、会員の皆様にも本財団への変わらないご支援をお願い申し上げる。

事務局より報告

■2023年度の行事計画

「活動の指針」

令和5年度においては、一般法人法等の関連法案及び定款に遵守した会の運営に 努める とともに、定款に定める目的を達成するため、日本文学の振興に関する各種事業を着実 に実施する。

「主な事業」

- 1. 芹沢光治良ノート・財団ニュースの刊行、無料配布
 - (1)活動内容

芹沢光治良に関して、幅広い年齢層の方に知っていただき、興味を持っていただくための「芹沢光治良ノート」及び「財団ニュース」を刊行し、無料配布を行うことで、芹沢光治良の業績と遺志を後世に継承する。

- 2. 朗読会・講演会の開催
 - (1) 活動内容

代表作である『巴里に死す』、『孤絶』を中心に、芹沢文学を後世に継承するべく、朗読会・講演会を開催する。

- (2) 活動時期
 - 令和5年6月、令和5年11月、令和6年2月
- (3) 活動場所

サロンマグノリアを中心に行う。

- 3. 財団ホームページの運営
 - (1) 代表作である『人間の運命2巻』1章~8章の朗読掲載を毎月1回ホームページに掲載し、若年層にも親しみやすいかたちで芹沢文学を後世に継承する。
- 4. 芹沢光治良に関する資料の整理、保管、活用
 - (1) 活動内容

芹沢光治良の資料のデータベース化を行い、ホームページに掲載することで、 文学愛好者同士の触れ合いの場をつくり、親しみやすいかたちで芹沢文学を後 世に継承する。また、芹沢光治良に関する著作物及び遺品・愛蔵品の整理、保 管を行う。

必要に応じて公開並びに展示貸し出しを行うことにより、芹沢光治良の業績と 遺志を後世に継承する。

■財団"マグノリアの会"主催

「第2回"巴里に死す"講演と読書会」報告(令和5年4月29日)

●演題 :【"巴里に死す"から浮かび上がる芹沢光治良が見ていたパリ】

●講師 : 杉淵洋一(聖学院大学 人文学部 准教授)

●報告

当日はGWの初日で快晴の空に多くの方がご参加くださり、初めての方が10名近くいました。有り難うございました。

「第1部 講演("巴里に死す"から浮かび上がる芹沢光治良が見ていたパリ)」

・杉淵先生の講演に、参加者の皆様は絶賛でした。

杉淵先生は光治良と同じく、フランス・パリに平成13年から7年間留学されており、 パリの隅々までご存知なので、「巴里に死す」の登場人物の宮村伸子の過ごしたパリ の風景や街並みを詳しく紹介してくれました。

最後にインターネットから探し出した、光治良が留学された頃の1927年の華やかな時代のパリの風景ををカラー映像で紹介してくださり当時の光治良ご夫婦が過ごしたパリを感じることが出来ました。

「第2部 "巴里に死す"フリートーク」

一部の余韻を持ってのフリートークでしたので、多くの方(12名)が活発に想いをお話しくださいました。

(参加者からの声)

- ・今回、光治良先生が実際に生活していたパリの風景や街並みを知り、今までは作品 を自分の知識範囲内のイメージで想像して作品を読んでいたが、今回は登場人物が もっと身近に感じて作品を読む楽しさを味わいました。
- ・杉淵先生の「巴里に死す」の地理的な芹沢先生が見た光景や歩いた道。宮村が青木 鞠子の住んでいた場所まで16キロ、歩いて行かれる距離など、発想は若くて面白か った。
- ・平面でなく立体的な読書方法も面白いですね。
- ・「巴里に死す」違和感なく読めた・・。
- ・長く読み継がれているのは、伸子が示した、今はなくしている日本人の道理("未来・子供"に重点を置く)を感じるから読み継がれているのではないでしょうか。などなど多くの感想がありました。

参加者の皆様、笑顔でお帰りになりました









若くてお元気な姿の

"光治良先生・文子さん・玲子さん"ご参加でした。

講師「杉淵洋一」

実をむすばん人に見られなくとも野の花のごと



『芹沢光治良ノートの紹介』(この度、芹沢光治良ノート(3)完成しました)

作家・芹沢光治良にまだ出会っていない人達に、芹沢光治良に出会っていただくための小さな冊子、「芹沢光治良ノート」を作成しました。

皆様が、芹沢文学を読んでくださり、語り続けられなければ、芹沢文学は滅んでしまいます。この冊子を家族、お知り合いとともに読んでいただき、芹沢作品を語り合っていただき、芹沢光治良を知らない知人に、芹沢光治良を知らせてあげてください。 読者が芹沢作品を手にすれば、芹沢光治良は必ず読者のそばに寄り添って、励ましてく

れます。 又、読者が、芹沢光治良を励ましています。 こんな思いで「芹沢光治良ノート」は作られています。

- ■「芹沢光治良ノート(1)」は、芹沢作品の根っこである"ふるさと我入道"が描かれた『完全版 人間の運命・父と子』を紹介しています。
- ■「芹沢光治良ノート(2)」は、光治良先生が、"魂のふるさと"と呼ぶ、パリを 舞台にした『巴里に死す』を紹介しています。
- ■「芹沢光治良ノート(3)」は、光治良先生が、欧州で体験した「病とは何か、死とは、生とは」生命の尊厳に正面から取り組んだ「孤絶」「離愁」「故国」と続く 三部作の第一作『孤絶』を紹介しています。

※財団HPの「芹沢文学ガイドとライブラリー」に掲載しています。

■ノート編集者からの一言

- ・編集仲間が、作品をめぐる対話をするのが、とても楽しいですね。 自分一人だけで読んでいると、文字通り「独り善がり」になることが多いのですが、 仲間の編集者の方のお話を聴いていて、いくつも新しい、素晴らしい「気づき」をもらえました。 「読みの協働作業」がもたらす、とても好い「経験」だなと思っています。
- ・作品の読み方や、推したい部分など、自分には無い発想が毎回出てくるので、最終的にどういう形のノートになるのかも含めて、そこが面白いと思います。 「芹沢光治良や作品に触れたことの無い方にも読んでもらえるように、興味を持ってもらえるように作る」というコンセプトなので、文章や画像も「なるほど」と気づかされることが多く、ためになります。
- ・ノートで取り上げる作品について、じっくりと繰り返し読み込むプロセスが、作品への理解を 深めることになり、初めは見過ごしていた様々な関連や意味合いに気付かせてくれます。 編集に参加して下さるお仲間との作品をめぐるやり取りが醍醐味です。それぞれの視点と 日ごろの興味関心(そこには自ずと各人の専門や人生経験が反映されています)に沿って、 作品から読み取る内容や、注目する箇所や文章についての意見交換が、とても有意義で 嬉しい作業です。
- ・編集のメンバーの方は、仕事を持っていて多忙な方ばかりです。 一年かけてノートは作成されるため、日程調整に苦労しましたが、Zoom会議が中心なので、 午後8時開始からの編集会議も多くありました。 対象作品を再読し、作品のイメージやテーマをどの様に表現するかの編集会議は楽しい。

■財団"マグノリアの会"主催 芹沢光治良没後30年記念(1)

「芹沢光治良・文子・玲子」を語る会 ご案内です!!

今年は、芹沢光治良の没後30年です。

没後30年記念として、"光治良・文子・玲子"の思い出を皆様と一緒に語り、偲ぶ会にしたいと思います。 多く皆様のご参加をお待ちしています。

-記-

- 日 時 令和5年 6月11日(日) 14:00 16:00(受付 1 3:30)
- 会場 サロン・マグノリア (東中野)
- 講演 櫻井信夫 (元新潮社 芹沢光治良担当)
- 募集 30名(予約制)
- お茶代 1000円(珈琲·茶菓子)
- ※ 詳細については、同封しています「光治良・文子・玲子」を語る会のチラシをご覧ください。

芹沢文学のまわりで シリーズ(2)

野見山恵美子 芹沢光治良記念会(学芸・作品資料)担当

■1982年 講演録より【魂というものは・・・】

芹沢光治良記念会所蔵の芹沢文学関連資料の中には、光治良自身の講演記録(書き起こし録等)があります。今回はその中から個人的にとても印象深く心に響いた一節(講演『神について』の最終部)をご紹介させていただきます。

<1982年11月21日:芹沢光治良文学愛好会第66回例会:東中野地域センターにて:「文芸講演会」として、当初は近代文学研究者の寺園司氏が『芹沢光治良における神』という題で講演する予定であったところ、出席が叶わず、急遽光治良自身が話すことになった。その最終部分の書き起こし(書式その他の点から、芹沢文子氏が書き起こしたと推測される。その最終部分の抜粋。>

そういう事実(注:芹沢光治良文学館が開館する年の春に、芹沢が体験した不思議な出来事:赤衣を着た婦人との邂逅)というのは、私は何か神ごとというのではないかなと思って。神が在るとか、ないとかいうことをどうかするんではなくて、やっぱり神は在るんだと。その神というのは、何か人を憎んだり、あるいはご利益、こういうことをしたらご利益がもらえるというものではなくて、もっともっと偉大な、大きなものだと、こういうふうに私は見ているつもりなんですけど。

そういうものが作品にどういうふうに現れるか、ということはまた別問題で、未熟だからそういうものでないってことがある。だけれど私は、もう一つ今自分で一番問題になっている問題がある、神の問題と関連して。それは魂というものはどうなのか、自分たちが死んだらどうなるのか、で、そのことは今まで自分が死ぬというような病気になった時にも、自分の魂はどうなるのか、死後のことなど考えたことはなかったんです。そんなことは考えてもしょうがないと、生きていることだけがこの人生だ、と思っていたんですけれども、最近になって、それだけでは済まされないような感じがして、一体自分が死んだらどうなるのだろうか、というようなことが感じられる訳ね。

というのは、私は今年五十数年連れ添った家内が死んだと。それから、その家内がいい人か悪い人かなんてことは、悪い人だったら五十何年も一緒に、どっちもいられやしないけれど、とにかく社会なんてものは、子供があったり、色々なことがあっても、とにかくつもの荒野みたいなもので、そこへ人間ていうのは一人だったら、一本立っている木のようなも知れた時というのは、やっぱり、それは経験者でなければ感じられないような何かがし、というのは、やっぱり、それは経験者でなければ感じらか、幸せというのは、わがあり、というのは、されが無動物の方が人間より幸せだ、という意味の幸せなんですよ。だけらでてきたものというのは、本気に人間が考えるべきものだなということを、やっと半年以上たって考え及んだんです。それまでは、なかなか迷い、精神が大きな偉大なものから見るとなっていないんですね、私なんかは。だもんで、腰痛になってみたり、こうだった、あたったと、仕事もなかなか熱が出なかったけど、そのことに気がついて、「そうだった、成というのは、どこから来てどこへ行くのかというようなことを本気に考えねばならないんだ。これが、自分のこれからの、少なくとも仕事のテーマだな」と気がついて、とたんにやっと、他のいろんな人が手伝ってもくれたけど、かなり元気になりましてね。

これから、その作品ができると、それに対して少しでも自分が納得するような解決ができれば、そこで私は、「神について」もっと恥ずかしがらずに語れるんじゃないかと、そんなふうに思っているんですけれどね。こんな話をしていると皆さん退屈をしてしまうから(笑)。まあ、そんなんでそれができたらと思って、励んでいるところです。それが出来たらもう一度、こういう話を真面目にしてみたいと思っています。

『編集後記』

2022年度の理事会も無事終わり、今年度(2023年)の行事計画も決まりました。 今年は、芹沢光治良没後30年の記念行事も計画しています。

会員の皆様と「没後30年」を一つの契機として芹沢文学を多くの方に広めていきたい と思います。 ご支援のほどよろしくお願いいたします。

■会員の皆様へのお願いです。

- ・皆様から将来の活動に向けてのご提案、コメントをお願いします。
- ・お知り合いの方に会員になっていただくようにお勧めください。会費無料です。財団ホームページより登録できます。

発行: 一般財団法人 芹沢光治良記念文化財団

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-3

事務局 池田 三省 メール: serizawa.52@nifty.com

財団ホームページ URL: http://serizawa-kojiro.com